

信州イスラーム世界勉強会 9月例会 講演録  
「メディアは何故『イスラーム原理主義』の台頭を見逃したのか」  
～アフガニスタン報道の現場から～

平成 30 年 9 月 22 日  
メディア・ガーデン スタジオ

みなさん、こんにちは。初めまして、杉山文彦と申します。私は時事通信社という会社で記者をやり、主に国際報道に携わってきました。海外には、ニューデリー、カイロ、パリの計 3 カ所に、合わせて 10 年半ほど駐在した経験があります。それから、おとし 9 月まで 2 年 3 カ月間は、長野支局長をしていました。私の任期中には、御嶽山の噴火という痛ましい災害がありました。その一方で、7 年に一度の善光寺のご開帳、諏訪の御柱（おんばしら）の祭りに運よく遭遇しまして、大変慌ただしい日々でしたが、そんな中でも信州の美味しいお酒と素晴らしい温泉をたびたび味わい、何よりも信州の人たちからいつも温かく接していただいたことが忘れられません。

私が長野に赴任していたとき、ここにおられる板垣先生たちとお話をする中で、イスラーム世界のことを信州の人たちに幅広く理解していただけるような勉強会をつくってはどうかということになりました。そして有志で話し合いを重ねた結果、この「信州イスラーム世界勉強会」が生まれたといういきさつがあります。今も私は、趣味の一つがジョギングなので、千曲川ハーフマラソンや上田古戦場マラソンといった大会で、信州にはときどきお邪魔をしております。

実は、私は飯田の隣の浜松、天竜川の河口で生まれました。その浜松の小学校 2 年生と 4 年生のときに、地元の学校を代表して出た「小学生話し方大会」で 2 度とも優良賞をもらいました。「将来は花のアナウンサーか」ともいわれていたほどです。ところが、今では、記事を書く方はいくらでもがんばりますけれども、マイクを持つとまったくさっぱりということになってしまいまして、今日も 原稿を見ながら、ぼちぼちお話をさせていただきます。

さて、きょうは「メディアは何故『イスラーム原理主義』の台頭を見逃したのか～アフガニスタン報道の現場から」と題してお話をしたいと思います。

もともとは、今年の初めごろでしたか、板垣先生から「イスラームと国際報道」というテーマで 「何かしゃべるように」と突然言われまして、最初は「えっ、何を話せばいいのか」と若干戸惑ったのですが、そのあとにいろいろ考えてみた末に思いついたのが、このテーマです。



このテーマの狙いをご説明する前に、そもそも、どうしてアフガニスタンなどという、日本にあまりなじみのない国の話をするのか、と疑問を持たれる方もおられるのではないかと思います。そこでまず、アフガニスタンという国のことについて、先に簡単にご説明をさせていただきます。私はニューデリー特派員だった1988年から、インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ブータン、モルジブ、アフガニスタンという南アジア8カ国のニュースをカバーしておりました。アフガニスタンには、合わせて4回くらい出張して取材を重ねた経験があります。きょうは、その時の見聞も交えながら、まずは基本的なところからお話ししていこうと思います。

ここにおられるみなさまは、国際問題についてはご関心の高い方々ばかりなので、「そんなことは知っているよ」といわれるかもしれませんが、ご容赦くだされば幸いです。ちなみに、この題字の背景の黒、赤、緑の旗は、アフガニスタンの今の国旗です。



こうして地図を見ますと、アフガニスタンはアジアの西の方に ある内陸国です。西隣にイラン、 東南にはパキスタン、そして北方には、かつて旧ソ連領だった中央アジアのトルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンと、そういった国に囲まれています。東西の世界を結ぶ十字路、いわゆる「戦略的要衝」に位置することが分かります。この地域は 軍事面でも貿易面でも非常に重要な場所だったために、昔からアフガニスタンには多くの異民族が侵入を繰り返してきました。

紀元前330年ごろには、ギリシャのアレクサンダー大王が、ペルシャへ遠征し、さらに東へ進軍して「バクトリア」という今のアフガニスタンの北部あたりまで来たとき、地元民の抵抗に遭って、大苦戦をしたというエピソードがあります。

きょう、これからお話しすることとも関係してくるのですが、そのころからアフガニスタン人というのは非常に勇猛な民族でした。「ブスカシ」という、馬に乗り、手に鞭を持った男たちが首のない1匹のヒツジを激しく奪い合うスポーツでも有名です。

19世紀の帝国主義の時代には、中央アジアから温かい南側へ勢力を広げようとするロシアに対抗する形で、イギリス軍がアフガニスタンを侵略しました。いわゆる「グレート ゲーム」とよばれるものですが、その第1次アフガニスタン戦争のとき、1839年に カブールに入城したイギリス軍に対して、アフガニスタン人は猛烈な抵抗を続け、1842年、世界最強のはずのイギリス軍の兵士4500人とその家来など、合わせて1万6000人が、全滅してしまったそうです。

その後、アフガニスタンは19世紀後半の第2次戦争でいったんイギリスの保護領にされてしまいます。しかし1919年、アマヌラ・カーン国王が第1次世界大戦の終結後の混乱に乗じてイギリス軍との第3次戦争を起こし、それに勝利を収めて、しっかり独立を勝ち取っています。

アフガニスタンは、地形的にはイラン高原の東側を占めています。国の真ん中をヒマラヤにつながる標高7000メートル級のヒンズークシ山脈が東西に走る山国です。ただ、山国といっても緑の豊かな信州とは違って、その山の多くは木が生えない、いわゆるはげ山です。乾燥していて、水の乏しい砂漠が続き、羊を飼う遊牧民の国です。

アフガニスタンの面積は日本の2倍弱、人口は今、3000万人くらいで、そのほとんどがムスリムです。伝統的にこの国を支配してきたのは、かつての王様たちを含めてパシュトゥン人というイラン系とされる民族で、人口の半分を占めています。このほかイラン系のタジク人、トルコ系のウズベク人や、ハザラと呼ばれるモンゴル系の人々もいます。こうした少数民族と、多数派のパシュトゥン人との間のいさかいがたびたび起きていて、それがこの国の混乱の一因ともなっています。

2016年時点のアフガニスタンの1人当たり国民総所得はわずか580ドル、日本円にしますと、年間に1人が6万5000円しか稼いでいないということになります。でも、この国はラピスラズリという深い青や藍色のきれいな宝石が取れることで世界的に知られています。大昔のクシャーナ朝時代のガンダーラ美術や、パーミヤンの仏教文化でも有名です。何よりもみんな貧しくてもホスピタリティー、おもてなしの気持ちにあふれた人たちが多くて、どんなときも、砂糖を入れた緑茶を出して迎えてくれます。

あるとき私は、アフガニスタンから戦火を逃れてきた難民300万人のキャンプが集中していたパキスタン北部のペシャワール近くへ現地取材に行きました。広い野原に無数のテントを張ったそのキャンプで取材中に、パスポートを盗まれてしまいました。それで、その難民を束ねる長老のところに行って事情を話しますと、その長老は私をお茶でもてなしながら、場内放送で「パスポートを盗んだやつは正直に出てきなさい」と放送してくれました。すると、しばらくして、10歳くらいの少年が私のパスポートを手を持って、おずおずと長老に渡しました。その長老は「外国から来たお客さんに何ということをするんだ」と少年を叱っていました。

このような素朴なアフガニスタン人の姿に親しんでいただくために、ここで少し、この国の人々の表情を、私が撮ったピンボケの写真でご紹介します。

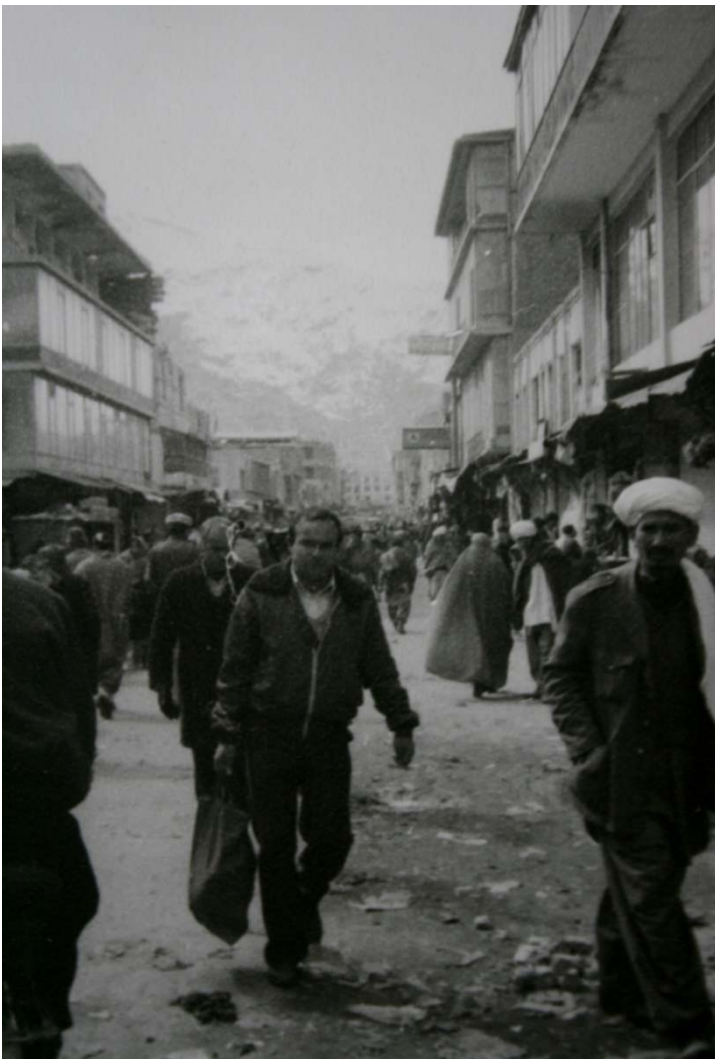
## 1、じゅうたんを編む少女



じゅうたんを編む少女(1990年ごろ、カブール市内)

この写真は、私がカブールのじゅうたん屋に行ったとき、その店の裏の作業場で一生懸命にウールのじゅうたんを編んでいた少女と少年を撮影したものです。その店で買った深い赤色のじゅうたんは、30年たった今も、私の自宅のリビングに敷いてあり、鮮やかな光沢を放っています。ペルシャじゅうたんも有名ですが、アフガニスタンのじゅうたんもかなり質が高いのではないかと思います。

## 2、カブール（1990年ごろ）



このころはまだ、まだ道行く人が洋服を着ていました。ピンボケでよく分からないと思いますが、後ろにかすかに見えるのが雪を頂いたヒンズークシの山々です。カブール自体が非常に高地にあり、その標高は、ここ松本よりも2倍以上高い1800メートルくらいです。なお、この街の読み方は、本当は「カブール」ではなくて「カーブル」です。



### 3、闘犬に興じるカブール市民



騎馬戦のブスカシだけでなく、闘犬もアフガニスタンの名物です。この当時はあまり娯楽がなかったなので、大勢の人が犬たちの戦いを取り囲んで見守っています。

### 4、カンダハルの風景



カンダハルはアフガニスタン南部の主要都市です。のどかな中世風の風景です。この国では今でもよくロバや馬を見かけます。

### 5、爆撃で壁が破壊されたバザール



しかし、カンダハルは、あのタリバーンの本拠地でもあります。この写真はタリバーンが出現する前のものですから、爆撃を行ったのはロシア軍かもしれません。

## 5、ナンを売る少女



インドの北部からパキスタン、アフガニスタンにかけては、パンの一種のナンが主食で、よくこうやって子供たちが街角で売っているのを見かけました。

## 6、内戦で片足を失った兵士



この当時は、陸路がゲリラに襲撃されるため、政府軍は空路を多用していました。右側はゲリラとの戦闘で足を吹き飛ばされて、カブール空港に戻ったばかりの、つえを引いている政府軍の兵士です。

ということで、そろそろ本題に入りますけれども、「メディアは何故『イスラーム原理主義』の台頭を見逃したのか」という、この問題が起きたのはいつごろかと申しますと、1979年暮れのソ連軍によるアフガニスタン侵攻から、2001年9月のアメリカでの同時多発テロまでの時期のことです。お手元の年表をご参照ください。

## アフガニスタン関連年表

|         |                                                          |
|---------|----------------------------------------------------------|
| 1973年7月 | アフガニスタンで宮廷クーデター、王制崩壊、ダウド元首相が政権掌握                         |
| 78年4月   | 人民民主党（PDP A）がクーデター、ダウド大統領を処刑、政権掌握                        |
| 79年2月   | イラン革命、ホメイニ師がイランに帰国                                       |
| 3月      | イスラエルとエジプトが平和条約締結                                        |
| 11月     | テヘランの米大使館人質事件（81年1月に人質53人全員解放）                           |
| 12月     | ソ連軍がアフガニスタンに侵攻<br>ウサーマ・ビンラーディン、アフガニスタン入り                 |
| 80年7月   | モスクワ五輪、西側諸国はボイコット                                        |
| 81年10月  | エジプトの過激派がサダト大統領を暗殺                                       |
| 85年3月   | ソ連共産党のゴルバチョフ書記長就任                                        |
| 86年5月   | PDP Aのカルマル書記長失脚、後任にナジブッラー政治局員が昇格                         |
| 7月      | ゴルバチョフ書記長、アフガニスタン駐留ソ連軍の撤退方針を表明                           |
| 88年5月   | 駐留ソ連軍が撤退開始<br>ビンラーディン、アルカーイダを結成                          |
| 89年2月   | 駐留ソ連軍の撤退完了                                               |
| 11月     | 「ベルリンの壁」崩壊                                               |
| 12月     | マルタ会談で米ソ首脳が冷戦終結宣言                                        |
| 90年8月   | イラク軍がクウェート侵攻、サウジアラビアに米軍駐留                                |
| 91年1月   | 湾岸戦争、米軍主導の多国籍軍がクウェート解放（2月）                               |
| 12月     | ソ連解体、冷戦が完全に終結                                            |
| 92年4月   | アフガニスタンのナジブッラー政権、反政府ゲリラの攻勢で崩壊                            |
| 96年9月   | タリバーン政権が誕生                                               |
| 98年8月   | ケニアとタンザニアの米大使館同時爆破事件、ビンラーディン関与説                          |
| 2001年9月 | アフガニスタンでマスード司令官が暗殺される<br>米同時多発テロ、米政府がタリバーンにビンラーディン引き渡し要求 |
| 10月     | 米軍がアフガニスタン空爆開始                                           |
| 12月     | タリバーン政権崩壊、カルザイ暫定政権が発足                                    |
| 04年10月  | カルザイ氏、大統領に当選                                             |
| 11年5月   | 米軍特殊部隊、パキスタンのアボタバードでビンラーディンを射殺                           |

2001年9月11日、アメリカで発生したあの同時多発テロは、皆さんも忘れられないインパクトがあるのではないのでしょうか。ニューヨーク・マンハッタンの世界貿易センタービル（110階建て）のツインタワーに、ハイジャックされた民間航空機2機が突入し、さらにワシントンの国防総省、ペンタゴンのビルにも1機が激突して、約3000人に上るおびただしい数の人命が奪われるなど、前代未聞のあまりに異常な事件でした。日本人24人も犠牲になっています。

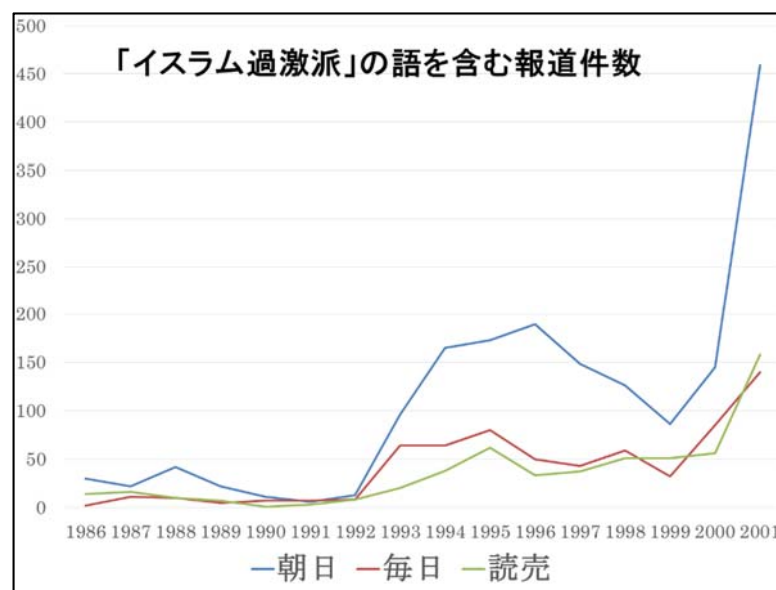
これを受けてアメリカ軍はビンラーディンをかくまっていたアフガニスタンを空爆し、タリバーン政権をカブール、さらにタリバーンの本拠地カンダハルから追い払いました。しかし、アフガニスタンでは今もタリバーンによる攻撃やテロが続いています。さらに国際テロは世界各地で続発し、何の罪もない人々がたびたび殺されています。

このような凶悪なテロの源流をたどっていくと、それはまさに1980年代のアフガニスタンに行きつきます。アメリカの同時多発テロの首謀者、ウサーマ・ビンラーディンは、イスラームの国アフガニスタンに対するソ連の侵略に怒って、アフガン・ゲリラの戦いを支援するために、サウジアラビアから義勇兵のような形でやってきました。そして支援活動をしているうちに、1988年ごろまでに過激派組織のアルカーイダを結成しました。そのアルカーイダを1990年代に国際的なテロ組織に仕立てて、アメリカでの同時多発テロなどを引き起こしていったわけです。

ところが、世界中を見渡しても、1980年代の時点で、そのような形の国際テロの危険な兆候に着目したメディアは、ほとんどありませんでした。実は先ほど触れました通り、私もそのアフガニスタンを何度も取材し、何百本も記事を書きながら、ビンラーディンのような過激派の動向に関しては、当時は1本も記事を書いたことがありません。

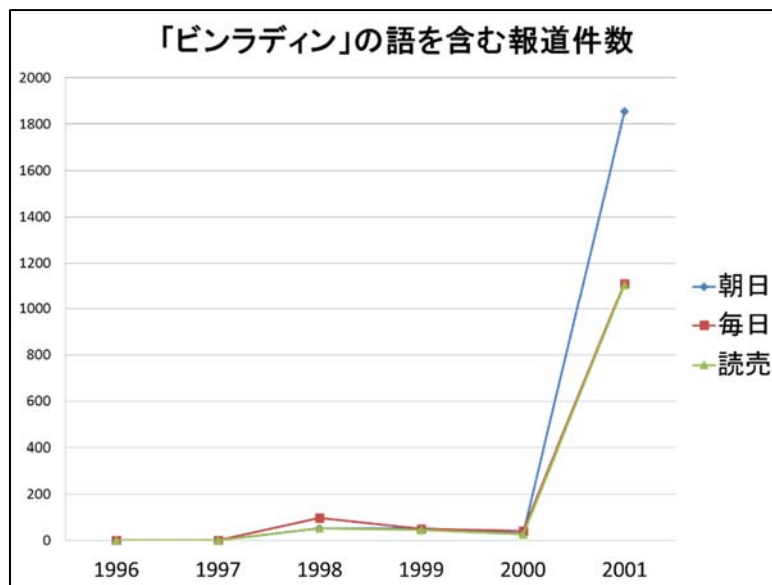
実際に、メディアの対応がどうだったのかを確認する一つの目安として、朝日、毎日、読売の各新聞に「イスラーム過激派」という言葉を含む記事が掲載された件数を、1986年以降、2001年までのデータベースで年ごとに調べて、グラフにしてみました。かなり荒っぽいデータではありますが、これを見ると、1980年代には、「イスラーム過激派」という言葉が登場するのは年間50件にも満たないことが分かります。当時はまだ「過激派」といえば、1970年代までの極左や民族主義のテロリストを指していました。「イスラーム過激派」という存在自体、一般にはなじみが薄かったということでしょう。

この言葉の掲載件数が増えるのは、ソ連軍の撤退後、中東へ戻ったアラブ人の義勇兵らがエジプトやアルジェリアで反政府テロ活動を激化させた1993年ごろからです。そして、アメリカの同時多発テロが発生した2001年に、件数が一気に跳ね上がっています。





さらに、同じように「ビンラーディン」という言葉を含む記事の掲載件数も調べてみましたけれども、こちらでもアメリカの同時多発テロの数年前、1990年代の後半まで、ほとんど皆無でした。つまり、少なくとも日本では、ビンラーディンという人物の存在自体を各社がかなり遅くまで把握していなかった、あるいは危険人物として報道しようとしなかったということになります。



それはなぜだったのか、なぜ注目されなかったのかを振り返ることが、今回の目的です。この種の過激派の危険性に、われわれメディアが早く警鐘を鳴らさなかったことが、アメリカの同時多発テロのような、最悪の事態を招く一因になったのではないかと、メディアがもっと早くからビンラーディンらの動向に気付いて報道していたら、もしかすると、あのような大惨事は起きなかったのではないかとと思われるからです。メディアの姿勢を改めて検証することによって、今後の国際報道の在り方を探る手掛かりの一つにしたいと考えました。

この重大な見落としの問題については、私はこれまでに何度も時事通信の同僚の特派員や、ほかのメディアの記者、さらには学者や専門家にも意見を聞いてみました。でも大半の人は、「それは無理でしょう、あのアフガニスタンでのソ連軍とゲリラの戦争中に、メディアが過激派のことまで考えている余裕などなかったのだから」といった反応でした。

(資料の『アラブ』のコピーを示す) 確かにその通りだとは思いますが。お手元にお配りした資料の中の記事は、私が4年ほど前に『アラブ』という雑誌に寄稿した文章です。ここに書きました通り、当時は冷戦のさなかで、アメリカを中心とした資本主義の西側陣営と、ソ連が支配する社会主義の東側陣営に世界は二分されていました。そして、互いに軍拡競争に走り、激しく対立していました。その一環としてアフガニスタンの紛争も報道されていて、過激派のことまで気が回らなかったということですが、その辺りについては、後ほど詳しく追っていきたいと思います。

# 1988～89年 ソ連軍アフガニスタン撤退 見抜けなかったイスラーム過激派の台頭

杉山 文彦

時事通信社外信部長

現代史を変えた大事件の一つに、ソ連軍のアフガニスタン侵攻がある。帝政時代から南下政策を進めていたロシア人は1979年暮れ、誇り高きイスラーム教徒の住むアフガニスタンの国土を突如軍靴で蹂躪した。

それによって米ソ両超大国間のデタント（緊張緩和）ムードは吹き飛んだ。日本を含む西側諸国が80年のモスクワ五輪を一齐にボイコットし、金メダル候補だったマラソンの瀬古、柔道の山下が唇をかんだことはご承知の通りだ。

アフガニスタンのムジャヒディーン（イスラーム戦士）と戦うソ連軍の戦費は1日当たり1000万ドル（現在の換算で10億円）に上った。ゴルバチョフ大統領が撤退を決断するまで、9年余にわたった不毛の戦いは、ソ連経済を一段と疲弊させ、ついにソ連崩壊、冷戦終結につながる。

だがこの戦争が実はもう一つ、現代史を変える元凶を生み出していたことに、当時現場で取材していた私は気づかなかった。ウサーマ・ビン・ラーディンらイスラーム過激派の台頭である。

駆け出し特派員として私がニューデリーへ赴任した直後の88年5月15日、11万人のソ連兵はアフガニスタンから撤退し始め、9カ月後の89年2月15日、全部隊が国境のアムダリヤ川の北方へ消えて行った。

アフガニスタンの首都カブールを私が初めて見たのは、ソ連兵の半数が撤退を完了した88年夏。カブール大学に通う女学生たちがスカートにブラウスという西洋風の服装だったのは意外だった。「女性が勉強し、社会で活躍するのは当然」と女学生が口々に赤い気炎を上げていたのを思い出す。市内のホテルでは、ロシア料理も堪能できた。

ところが「ソ連のかいらい」と呼ばれた社会主義政権のナジブッラー大統領が92年4月、内戦に敗れた後、状況は一変する。

ムジャヒディーンの新体制は国名を「アフガニスタン・イスラーム国」に変更し、飲酒禁止、女性のチャドル着用義務付けなどを打ち出した。

前年帰国していた私は、東京から再びアフガニスタンに入った。驚いたのは、カブールの街中から外国料理店が姿を消し、羊肉のシシカバブの店ばかりになっていたことだ。スカート姿の女性など、もはやどこにも見当たらなかった。

96年9月、さらに過激なタリバンの政権が誕生する。そのタリバンにかくまわれたビン・ラーディンが2001年9月、米同時テロを起こし、3000人近い人命を奪った。

私はニューデリー特派員時代、ムジャヒディーンの拠点、パキスタン北部ベシワールでも取材を重ねた。ここにビン・ラーディンらがアラブ世界から義勇兵として結集し、ムジャヒディーンに過激思想を浸透させたことを知ったのは、ずいぶん後のことだ。

ソ連軍と戦うアフガニスタン反政府ゲリラ7派のうち4派は「原理主義グループ」と呼ばれた。その意味を私は深く考えず、米ソの代理戦争で荒廃したこの国の再建に向けて「イスラーム」を旗印にする勢力くらいにしか理解していなかった。

私だけでなく、冷戦末期の当時、世界中のジャーナリストの大半が、アフガニスタン紛争を東西対立の視点から見ていたと思う。イスラーム過激派の危険性に警鐘を鳴らした記事は少なかった。

米同時テロが発生したのは、私がニューデリーでの特派員生活を終えてから、ちょうど10年後のことだ。私を含めてジャーナリストの誰かがもっと早く、別の視点からあの戦争を追っていたら…。振り返るたびに悔恨の思いが募る。



すぎやま・ふみひこ

1981年時事通信社入社。88年～91年ニューデリー特派員、97年～2001年カイロ特派員、07年～10年パリ支局長などを経て、12年2月から現職。

ともあれ、ソ連軍のアフガニスタン侵攻はアメリカをはじめ西側の諸国からすさまじい反発を浴びました。1980年のモスクワオリンピックを欧米や日本などの西側諸国が一斉にボイコットし、金メダル候補だったマラソンの瀬古利彦選手、柔道の山下泰裕（やすひろ）選手が唇をかんだことを覚えていらっしゃる方も多いと思います。

このソ連軍の侵攻が、ビンラーディンらの台頭と国際テロにつながっていくわけですが、そもそもソ連軍はどうしてアフガニスタンに侵攻したのか、その動機には今でも謎が残っています。そんな侵略をすれば、ソ連が世界的にPRしていたモスクワオリンピックをボイコットされることは目に見えていたし、何よりも1日10億円にも上る膨大な戦費がかかり、それは経済的にも厳しかったはずで

す。アフガニスタン侵攻の動機としてはいろんな説がありますが、底流には、19世紀から続く南下政策の延長という側面があったのだと思います。寒いロシアからインド洋への出口を求めて南の中央アジアを支配下に加えたロシア、そしてソ連は、さらなる南下を狙い、実は1950年代には、既にアフガニスタンに軍事的に関与していました。

1953年に首相になった王族の一人、ムハンマド・ダウドとつながりを深めたソ連は、1955年から積極的に軍事支援を始めました。そのダウドは、近代化改革を急激に進めすぎてイスラームの宗教界から反発を買い、ザヒル・シャー国王から1963年に解任されましたけれども、1973年、国王がイタリアへ外遊中だった間隙を突いて宮廷クーデターを起こし、王制を廃止して、初代大統領となります。

ダウドは宗教界、特にいわゆる「イスラーム原理主義」の勢力を弾圧し、再び近代化を進めようとして、その過程でソ連の野心を見抜いたのですが、ソ連寄りの左翼政党であるアフガニスタン人民民主党と対立することになりました。こうした中で、左翼支持派の将校が1978年4月にクーデターを起こし、ダウドは一族18人と一緒に皆殺しにされてしまいます。

というわけで1978年の時点で、既に左翼体制がアフガニスタンに成立していたわけですが、この人民民主党も内紛を起こして収拾がつかなくなったために、業を煮やしたソ連は、ついにアフガニスタンを自ら武力で奪い取るという、新たな南下政策の推進に踏み切ったわけです。

もう一つの要因としては、1979年2月に起きたイラン革命もありました。隣国のイランでいわゆる「イスラーム原理主義」の革命が成功したのを見て、アフガニスタンのイスラーム勢力は「われわれも」というふうに奮い立ちました。イランの中心的な宗教はイスラームのシーア派で、アフガニスタン人の多くはスンニ派という違いはありますが、とにかく1978年のクーデター後、左翼政権が土地改革などを進めたのに対して、アフガニスタンのイスラーム勢力は反政府の抵抗運動を強めていました。翌年のイラン革命とその年11月に起きたテヘランのアメリカ大使館人質事件を受けて、イスラーム勢力は、ますます勢いづいていったのです。

このような状況から、イスラーム教徒の多い中央アジアを国土に抱えるソ連の共産党政権は、イラン革命やアフガニスタンの動向が、自分のところまで波及しかねないと危機感を抱きました。そのために、アフガニスタンのイスラーム化が進むのを阻止する狙いで、侵攻したのではないかという見方もあります。

いずれにせよ、ソ連軍はそれから9年2カ月間、アフガニスタンの泥沼にはまりこんでしまいました。先ほど少しご説明したあの19世紀のイギリス軍と同じように、20世紀最強と言ってもいいソ連軍も、やはり勇猛なゲリラ勢力の激しい抵抗に遭ったわけです。ソ連がいくら巨額の戦費を注ぎ込んでも、アフガン・ゲリラは一步も引かず、この不毛の戦いは案の定、ソ連経済を疲弊させて、ソ連崩壊の引き金になっていくわけです。

年表にお書きした通り、1985年に就任したソ連のゴルバチョフ共産党書記長は、1986年7月、アフガニスタンからソ連軍を撤退させる決断を初めて下し、冷戦終結への一步を踏み出しました。そして1988年5月、ソ連軍は撤退を開始し、1989年2月までに、全軍が北方へ帰っていきました。

ちなみに、私がアフガニスタンに初めて入ったのは、駐留ソ連軍の半数が撤退した1988年8月のことです。カブールで泊まったホテルの上空を、夜中までソ連の軍用機やヘリコプターが轟音を立てて飛び回り、もううるさくて眠れなくて、本当に困りました。文字通り、戦時下でした。街角には、若い金髪のソ連兵たちが、カーキ色の軍服姿で、銃を抱えて、たむろしていたのを覚えています。

そんな中で意外だったのは、カブール大学を取材に訪れたときに見かけた女子大生がみんな、カラフルなスカートにブラウス姿だったことです。伝統的なチャドル姿の女学生は一人も見当たりませんでした。その女学生たちにインタビューすると、大変に意気盛んでして、「女性が勉強し、社会で活躍するのは当然です」と口々に話していました。

アフガニスタンというのは、かなり保守的なイスラームの国で、信心深い遊牧民の伝統を今も強く持っています。その半面、王制時代の20世紀前半から、首都のカブールなどの都市部では、西欧流の近代化が試みられていました。同時代のトルコ近代化の父、ムスタファ・ケマル・アタチュルクや、イランのパーレビ王朝を創始したレザ・シャーといったこの地域の国家指導者たちが、大胆な西欧化路線に着手していましたから、それに倣ったのでしょう。

アフガニスタンでは1973年にザヒル・シャー国王が失脚してからも、それに続くダウド政権、左翼政権まで、指導者がずっと近代化を信奉していたために、とりわけ都市部の女性たちにとって、当時は、西洋式の服装には抵抗がなかったのだと思います。

カブール市内の一流のホテルでは、ロシアの煮込み料理の「ボルシチ」を堪能できましたし、街のバザールに行けば、日本の電化製品をはじめ、高級じゅうたん、絹織物、キャビアの缶詰めまで、世界中のいろいろな品物があふれていました。

面白いのは、私がニュースをカバーしていた南アジアの8カ国の中で、当時首都にデパートがあったのはアフガニスタンのカブールだけだったということです。ですから私は、その当時、アフガニスタンよりも貧しかったインドのニューデリーからカブールに出張しますと、街の中心部にあった5階建てのこぎれいなデパートへ駆け込んで、娘のためにヨーロッパ製のおもちゃを買って、インドへ帰ったこともあるほどです。

今では、あの歌舞音曲全面禁止のタリバーン政権のイメージがあるためか、アフガニスタンというのは、男性がみんなひげを伸ばし、女性はみんなチャドルで全身を隠している極めて前近代的な国なのだろうという印象をほとんどの人が抱いているのではないかと思います。でも実はそれはナジブッラー政権が倒れた1992年代以降のことです。確かにそのあとは、カブールの街中からも外国料理店が完全に姿を消し、女性はみんなチャドル姿になってしまいましたけれども、実は、ソ連軍が侵攻していたころは、まだ社会風俗の面では普通のアジアの国だったということです。

ソ連軍が撤退を完了した後の1989年5月、私は再びカブールに入りました。ちょうどイスラームのラマダン明けの「イード」と呼ばれるお祭りのさなかでしたけれども、カブール川沿いにピクニックに来ていた子供連れの女性の多くは、まだ洋服姿でした。東隣のパキスタンでは、そのころ、イスラーム化が徐々に強まり始めて服装の規制が厳しくなっていましたから、むしろアフガニスタンの方が、そういう面の自由が保たれていたという印象があります。

さて、だいぶ話が横道にそれましたが、この1989年という年には、世界を見渡しますと、ソ連圏の東ヨーロッパ諸国で民主化革命が相次ぎ、東西ドイツを隔てていた「ベルリンの壁」が11月に崩壊しました。12月にはゴルバチョフ書記長とアメリカのブッシュ大統領が地中海のマルタで会談して、冷戦終結を宣言しました。そして、1991年12月にソ連が解体され、冷戦時代は完全に終わりを告げます。

こうした大きな時代の流れを背景に、マスメディアによるアフガニスタン報道というのは、東西対立とその終焉、冷戦終結という歴史的ニュースの一環として扱われることが多かったわけです。現地にいる特派員も、常にアメリカとソ連の動向を見守っていて、そのひとコマとしてアフガン・ゲリラの動きなどを取材していました。ですから、ゲリラや義勇兵が過激化しているといったような、細かな動きは目に入らなかった面があったのは事実です。

つまり、ビンラーディンたちの動きを見落とした第1の理由として、われわれメディアが、冷戦終結というニュースのフレーム、型にはまった枠組みの中での報道に終始してしまい、残念ながら、ほかのことに注目していなかったというジャーナリストとしての注意力不足は否定できないところでしょう。

アフガニスタン紛争に限らず、メディアには1つの大きな社会的事件が起こると、それに取材を集中させることによって、ほかのニュースのカバーがおろそかになってしまうという傾向があります。これはジャーナリズム論のメディア批判でも、重要な研究テーマの一つとなっています。



しかし、アフガニスタンに関しては、単なる記者側の見落としだけが問題わけではありません。第2の理由として、代理戦争の敵同士であるアメリカとソ連、さらにその傀儡政権の国家機構による戦時下の特殊な行動と情報管理という問題がありました。それによって、自由な報道が困難になったり、情報が偏ったりしていたことが挙げられます。

言い換えますと、アフガニスタン報道というのは、特殊な状況下での戦争報道でした。かつて日本でも、太平洋戦争当時に大政翼賛的な報道が繰り返されたことを思い起こしていただければお分かりかと思います。アメリカとソ連も盛んにプロパガンダの競争をしていたわけですし、それぞれの当局が、自分の方に都合の良い情報ばかりを選んで流していた、という問題を指摘できると思います。

まず、アメリカにつきましては、対ソ連戦を優位に進めるために、アフガニスタンで左翼の政権に対する反政府運動を以前から続けていたいわゆる「イスラーム原理主義」組織を中心とするアフガン・ゲリラたちを、ソ連との戦いに振り向ける形で積極的に利用しました。そして、そのゲリラたちのことを「良いムスリム」として宣伝していたという問題があります。



それをご説明する前に、皆さんはこの「マスードの戦い」という本の写真の人物をご存知でしょうか。

そう、アフマド・シャー・マスード司令官です。アフガニスタンの国民的英雄として日本でも有名になったので、知っている方も多いのではないかと思います。マスードは1952年、アフガニスタン北東部のパンジシール溪谷の村に、タジク人の軍人の子供として生まれました。カブール工科大学に在学中の1973年、王制が倒れて次第にソ連の圧迫が強まっていくことに危機感を感じ、いわゆるイスラーム原理主義のゲリラ組織の一つ、「イスラーム協会」に合流して、ソ連軍の侵攻後に大活躍します。

マスードは戦略的要衝である故郷のパンジシール溪谷にゲリラの指揮官として陣取り、ソ連軍の大攻勢を何度も撃退して、「パンジシールの獅子(しし)」「パンジシールのライオン」という勇名をとどろかせました。武力に勝るソ連軍に巧妙な作戦を仕掛けて圧倒し、ゲリラ戦の天才とも評されました。

その後、1996年にタリバーン政権が誕生してからも、マスードは狂信的なタリバーンのやり方を嫌い、反タリバーン連合の最高指導者の一人として戦い続けていました。しかし、2001年のアメリカ同時多発テロの2日前、ベルギー国籍のジャーナリストを装ったアルカーイダのテロリスト2人による自爆テロによって暗殺されてしまいます。

私は1992年5月、ナジブッラー政権の崩壊後に、新政権の国防大臣になったばかりのマスード本人の記者会見をカブールで取材したことがあります。われわれ記者団が会見場で待っていても、マスードがなかなか現れません。どうなったのだろうと心配していたところ、突然、記者たちの意表を突くように、その会見場の後ろ側の扉がパツと開いて、さっそうとマント姿のマスードが登場したので、度肝を抜かれた経験があります。

いかにもゲリラ戦の天才らしいパフォーマンスだったのですが、その記者会見でマスードは、軍事問題よりも、識字率が低いアフガニスタンでの教育の重要性を強調していました。彼はカブール市内にあるフランス系のリセ（フランス語で教育する高校）を出ていて、大変な読書家だったということです。また、自分のカブールの家を、寺子屋のように、子供たちに開放していました。私も、アフガニスタンの英雄の家とは思えないほど質素な、そのカブールの下町にある2階建ての家を取材に行きましたけれども、そこを管理していた女性が、マスードのことをすごく尊敬していたことを覚えています。

ちなみに、この本を書いた有名なフォトジャーナリストの長倉洋海（ながくら・ひろみ）さんは、もともと時事通信社の写真部に所属しておられた私の先輩で、マスードを17年間も撮影し続けた人です。長倉さんはマスードが死んだとき、時事通信の取材に対して、「マスードとは20年近い付き合いで計450日間、ともに生活した。外国人とも分け隔てなく付き合い、敵だったロシア人兵士がイスラームに改宗して彼のボディガードを買って出るなど、人間的魅力にあふれていた」と話しています。

その英雄マスードのことを、欧米メディアは日本以上に大きく扱っていました。まさに彼は「良いムスリム」の典型です。マスード自身については、私も本当に良い人だったのだろうと思いますけれども、欧米でそういう報道がなされた背景には、アメリカのプロパガンダも働いていたのではないかと思います。

そして、それが結果として、ビンラーディンのような過激派の台頭をメディアが見落とす重大な要因の一つになった可能性があります。

先ほども触れました通り、ソ連軍がアフガニスタンに侵攻する直前の1979年11月、イランではテヘランのアメリカ大使館がホメイニ派の学生らによって占拠され、外交官ら53人が1981年1月まで、444日間も人質にされました。それによってアメリカでのイスラームのイメージは著しく悪化しました。

今でもアメリカ人の多くは、あの人質事件の影響で、イラン人をものすごく恨んでいるようです。このあいだ、イランの核合意をひっくり返して、再びイランに制裁を科したトランプ大統領のことを思い出していただければ、お分かりでしょう。

だから、あの人質事件によって、イラン人はアメリカ人の間で「悪いムスリム」のレッテルを張られました。そういう中でアフガニスタンにソ連軍が侵攻したために、アメリカ政府としては、とにかく戦闘力のあるムスリムのゲリラを利用して、ソ連軍の侵攻を食い止めなければならなかった。そこで、アメリカ国民を納得させるためにも、アフガン・ゲリラのイメージを「良いムスリム」に転換する必要があったということです。

アフガニスタンに侵攻したソ連軍とアメリカ軍が直接戦うわけにはいきません。そんなことをすれば、まかり間違えば第3次世界大戦に発展してしまいかねないということで、そこでマスードたちのように、以前からソ連に対する抵抗運動を続けてきたゲリラに白羽の矢が立ったということです。

これまでお話しした通り、アフガニスタン人は勇猛なことで知られています。だから、多少荒っぽくても、勇敢で戦闘力があれば目をつぶろうということで、アメリカの中央情報局（C I A）は、パキスタンの諜報機関 I S I を通じて、パキスタン北部のアフガニスタン国境に近い町ペシャワールに拠点を置いていたアフガニスタン反政府ゲリラ7派（通称ペシャワール・セブン）に資金と武器を注ぎ込みました。

ちなみにこのペシャワールを含むパキスタン北部は、もともとはアフガニスタンの領土で、パシュトン人の住む「パクトニスタン」という地方の一部でした。つまり、今のアフガニスタンの北東部と、パキスタンの北部は、同じ民族のふるさとだということです。しかし1893年、植民地を求めるイギリスの要求によって、カイバル峠の東西が分断され、東側はイギリス領インドに加えられました。それが第2次世界大戦後のインド・パキスタン分離独立によって、パキスタン領に含まれたという経緯があります。

パキスタン側のパシュトン人の有名人といえば、最近では、タリバーンによる女子教育の弾圧に対する反対運動をして殺されかけた人権活動家で、2014年にノーベル平和賞を受賞したあのマララ・ユスフザイさんが知られています。

ともあれ、分断されても同じ民族同士ですから、お互いの行き来にはあまり違和感はないわけですし、7つの主要なゲリラ組織はペシャワールに集結し、そこからソ連軍と戦うためにカイバル峠を越えて、アフガニスタンの戦場へ向かっていました。

この「ペシャワール・セブン」と呼ばれる7組織は、主張がばらばらで、「ソ連軍打倒」の一点だけで大同団結していました。この7つを大別すると、イスラーム国家の樹立を掲げるいわゆる「原理主義」の4つのグループと、ザヒル・シャー元国王の復権による王政復古を目指す3つのグループがありました。

その中でも、パキスタン軍の諜報機関 I S I から特に多くの支援を受けていたのは、以前からの反政府活動で戦闘力を付けていた「原理主義」の4グループです。この4つのうち3つは、多数派のパシュトン人のグループでしたが、マスードが所属していた「イスラーム協会」だけは、ブルハヌディン・ラバニというタジク人のイスラーム法学者が率いていた組織です。タジク人はパシュトン

人に対するライバル心が旺盛で、この二つの民族は、今もいがみあいを続けています。

パシュトゥン人を国内に抱えるパキスタンには、やはりパシュトゥン人の組織を支援することによってアフガニスタンに対する影響力を強めたいという戦略的な思惑がありました。ちなみに、あのタリバーンというのは、まさにパシュトゥン人至上主義のグループでありまして、事実上、パキスタンの諜報機関がつくった組織です。

さて、C I Aからパキスタン経由で膨大な武器や資金を獲得していたこのアフガン・ゲリラ、まとめて「ムジャヒディーン」、聖戦の戦士とも呼ばれましたが、それに加わったのが、アラブ諸国からソ連軍侵攻後にやってきたアラブ人の義勇兵たちです。

当時、アラブ諸国では、ソ連軍に侵略されたイスラームの国アフガニスタンを救おうという一大キャンペーンが繰り広げられていました。義勇兵になりたいという志願者は何万人にも上ったということで、その一人がビンラーディンでした。彼はサウジアラビアの大富豪の御曹司なので、当初は戦闘よりも、資金を分配する役回りだったとも伝えられていますけれども、ほかのアラブ諸国から来た義勇兵らとも盛んに交流していたようです。

その中には、ビンラーディンに過激思想を吹き込んだとされるサウジアラビア人の宗教家、アブドゥッラー・アッザームや、1981年のエジプトのサダト大統領暗殺事件を引き起こした過激派組織「ジハード団」に所属し、この暗殺事件に連座して3年間獄中にいた医者アイマン・ザワヒリら、そうそうたる活動家がありました。こうした活動や人脈を通じて、ビンラーディンはやがてテロ組織アルカーイダを築いていくことになるわけです。

これらの義勇兵たちは、実はアフガン・ゲリラとはソ連との戦いの目的が微妙に違っていました。マスードたちゲリラの目標というのは、あくまで祖国の解放にあったわけですが、ビンラーディンら義勇兵の方は、この戦いをイスラームのジハード、聖戦と見ていました。つまり、ビンラーディンらは、アフガニスタンだけではなくて、パレスチナを占領したイスラエルにも怒り、イスラエルと和平条約を結んだエジプトのサダト大統領を殺し、そのイスラエルを支援するアメリカに対しても、深い恨みを抱いていたということです。

実際、ビンラーディンがその後テロに走った大きな要因は、1990年8月のイラク軍のクウェート侵攻から1991年1月の湾岸戦争までの時期に、サウジアラビアがイラクに対抗しようと、イスラームの聖地メッカとメディナを抱える自国内にアメリカ軍を迎え入れたことでした。これは、アフガニスタンの問題とは何の関係もありません。

ところが、アメリカには、アフガン・ゲリラとアラブ義勇兵という二つのムジャヒディーンの違いがよく分からず、とにかくソ連との戦いに勝つことが狙いだったので、それに協力してくれるムスリムは、みんなイランとは違う「良いムスリム」だと見なして、慎重に区別もしないまま、武器と資金をのちに

テロリストになるアラブ義勇兵にも、しゃにむに注ぎ込んだわけです。

パレスチナ出身のアメリカの文学者で批評家のエドワード・サイードは、「アフガニスタン侵攻後、おそらくわれわれは、良いムスリムを劇的に切り離すことが多くなり、……アフガンの反政府ゲリラのような良いムスリムの功績をたたえるニュースを大量に提供され、良いムスリムを反共主義と同一に扱うようになってきている」とアメリカ当局とメディアへの批判を込めて評しました。

サイードの言うように、アメリカ当局の善玉・悪玉論的な考え方に基づくプロパガンダ、さらにはそれを真に受けて報道した欧米メディアの姿勢が、先ほども申し上げた通り、ビンラーディンという怪物を野放しにする結果になった大きな要因だろうと思います。

さて一方、ソ連の場合はそもそも国営のタス通信がプロパガンダ機関そのものですが、アフガニスタンではソ連のかいらい政権による厳しい情報統制が行われていました。そしてそれが、メディアにとっては状況が正確に見分けられない深刻な要因となりました。

(パワポで写真を表示) この写真、「カブールの市場で豆を売る少年」と題したスナップですが、その右上にトレンチコートを来た男性が写っているのがお分かりでしょうか。(パワポで拡大写真を表示) ちょっと拡大してみました。この人は、私がアフガニスタンで取材したときに通訳をしてくれたナジブッラー政権時代の外務省職員、アティクラ・シャヒードさんという男性で、当時32歳くらいだったと思います。



ソ連のかいらいと呼ばれたナジブッラー政権は、メディアに対してもソ連流の厳しい取材規制をかけていました。例えば、私のような外国人特派員がアフガニスタンへ取材に来ると、シャヒードさんのような外務省プレスセンターの若手が必ず空港まで出迎えに来ます。そして通訳を担当し、取材先にも



ぴったりくっついて来るわけです。政権の意向に反するような記事を書いてもらっては困るので、まさに「見張り役」ということでしょう。

アフガニスタンの公用語はペルシャ語系のダリ語とパシュトゥー語です。しかも英語も通じにくいために、外国の記者は、どうしても外務省職員に頼らざるを得ないわけです。その場合、われわれが取材するときの政権に都合の悪い発言は、意図的に「誤訳」されているのではないかという疑問が常に付きまといまいます。それに加えて、取材される側の市民も、外国人記者の通訳が政府当局者だと分かっていますから、なかなか本音を明かしてくれないということになります。

シャヒードさんは、何度も私の通訳を務めてくれたのですが、ほかの外務省職員のように通訳としての「サービス料」、つまりいろいろをせびることもなく、とても実直な人でした。カブール大学の経済学部を次席で卒業したキャリア外交官だということです。

私が何とかアフガニスタンの市民から本音の話を聞き出せる取材をしたいと思っていたところ、1989年5月に現地入りしたときに、シャヒードさんはカブール市内の狭いあばら家のような自宅に私を招いて、そこで意外な家庭の事情を打ち明けてくれました。

それによりますと、シャヒードさんは男ばかり7人兄弟の長男で、6カ月前まで徴兵に取られ、政府軍の陣地にいたのだそうです。すぐ下の弟も、アフガニスタン東部の要衝ジャララバードに出征中で、ゲリラと戦う日々だということでした。

ところが一方で、残る弟たちのうちの二人はゲリラ側についたということです。その二人はどちらも医者で、パキスタン北部のペシャワールの病院に勤務し、アフガニスタン政府軍との戦闘でけがをしたゲリラの手当てをしているとのことでした。

シャヒードさんは「私はナジブッラー政権のためではなく、国の再建のためにここにとどまりました。ペシャワールへ行った弟たちは、危険を感じて難民になりました。それだけの差で、手紙も届くし、兄弟のきずなは代わっていません」と淡々と話しました。それにしても、同じ兄弟が敵と味方に分かれてしまうという現実には、戦争の悲惨さを改めて感じさせられたものです。

ともあれ、こういうことを聞き出すことさえ、なかなか難しいのが、ソ連流の情報統制下にあったアフガニスタンの実情です。だから、ビンラーディンのような過激派の動向を追うことが、そもそもいかに困難かということが、お分かりいただけるかと思います。

ここまで、ビンラーディンらの動きをメディアが見落とした理由について、第1に冷戦終結という歴史的な重大ニュースの枠組みにとらわれて、過激派の動向まで目が向かなかったこと、第2には戦争報道という特殊な状況の下で、アメリカもソ連とそのかいらい政権も、メディアを使ってプロパガンダを行おうとしたということをお話してきました。

それに加えて、過激派の動きを見落とした第3の理由として、こうした国際報道を事実上、支配しているのが欧米諸国の主要メディアであり、そういうメディアが国際問題を取材・報道をするときには、どうしても欧米中心の視点からニュースを捉えるために、それ以外の国から見ると、しばしば偏見の入った記事になるという問題が挙げられます。とりわけイスラーム世界をめぐる報道は、西欧とイスラーム世界の長い歴史的ないきさつもあって、その傾向が強いように見受けられます。

エドワード・サイードは、欧米中心の「イスラーム報道」によって、イスラームの社会は一つの地域社会とみなされ、「多様なムスリム世界のあらゆる局面をことごとく飲み込んで、すべてを特別の悪意のある無分別な実体に矮小化してしまう」と批判しています。

サイードは、特にイラン革命をめぐるアメリカの報道の画一的な「イスラーム悪玉論」を指摘していますが、アフガニスタン紛争でも、アメリカ当局がソ連との戦いにムジャヒディーンを利用し、「良いムスリム」だと持ち上げれば、メディアの方もそれをほとんどそのままのみにして、ニュースを流していた印象がありました。

そして、われわれとも関係のある深刻な問題は、欧米以外の国のメディアというのは、もちろん日本のメディアもそうですが、圧倒的なネットワークと資金力を持つ欧米メディアにほとんど追従せざるを得ないという点です。

特に国際ニュースの業界で影響力が強いのは、世界3大通信社と呼ばれるイギリスのロイター、アメリカのAP、フランスのAFP通信です。この3つの通信社は、19世紀の帝国主義の時代からの植民地ネットワークや世界的言語の英語、フランス語を武器に、まさに地球規模で特派員の取材網を持ち、世界中の新聞やテレビ、インターネットに膨大な量のニュースを流しています。しかしながら、もともとは植民地獲得競争を通じて発展したメディアですから、欧米の歴史的、政治・経済的な利益から完全に独立しているとは言い切れないのが実情だと思います。第三世界から1970年代に、ユネスコを通じてこの問題が提起されたこともありますが、いまだに状況は変わっていません。

日本の大手通信社である共同通信と時事通信、また朝日、毎日、読売、日経といった全国紙やNHKなども、お手元に配布した資料の通り、一応自前の海外支局はあります。けれども、各社とも海外支局の数はわずか20カ所から40カ所くらいです。この程度のネットワークでは、とても世界全体をカバーすることはできません。ですから、それぞれ3大通信社のどれかと契約を結び、本社や特派員の端末を通じて記事の配信を受け、自前の情報では足りない部分を補っているわけです。

日本メディアの海外支局 (2014 年時点)

|          | 共同 | 時事 | 朝日 | 読売 | 毎日 | 日経 | 産経 | NHK |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| ソウル      | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| 平壤       | ●  |    |    |    |    |    |    |     |
| 北京       | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| 上海       | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| 広州       | ●  |    | ●  | ●  |    | ●  |    | ●   |
| 大連       |    |    |    |    |    | ●  |    |     |
| 重慶       |    |    |    |    |    | ●  |    |     |
| 瀋陽       |    |    | ●  | ●  |    |    |    |     |
| 香港       | ●  | ●  | ●  | ●  |    | ●  |    | ●   |
| 台北       | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| バンコク     | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  |    | ●   |
| シンガポール   | ●  | ●  | ●  |    |    | ●  | ●  | ●   |
| ジャカルタ    | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  |    | ●   |
| マニラ      | ●  | ●  |    |    |    | ●  |    | ●   |
| ハノイ      | ●  | ●  | ●  |    |    | ●  |    | ●   |
| ヤンゴン     | ●  |    | ●  |    | ●  | ●  |    |     |
| クアラルンプール |    | ●  |    |    |    | ●  |    |     |
| プノンペン    | ●  | ●  |    |    |    |    |    |     |
| シドニー     | ●  | ●  | ●  |    |    | ●  |    | ●   |
| ニューデリー   | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| ムンバイ     | ●  |    |    |    |    | ●  |    |     |
| イスラマバード  | ●  |    | ●  | ●  |    |    |    | ●   |
| カブール     | ●  |    |    |    |    |    |    |     |
| カイロ      | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| エルサレム    | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  |    |    | ●   |
| テヘラン     | ●  |    | ●  | ●  | ●  | ●  |    | ●   |
| バグダッド    | ●  |    |    |    |    |    |    |     |
| イスタンブール  |    |    | ●  |    |    | ●  |    |     |
| ドバイ      |    |    | ●  |    |    | ●  |    | ●   |
| ナイロビ     | ●  |    |    |    |    |    |    |     |
| ヨハネスブルク  |    |    | ●  | ●  |    |    |    |     |
| ロンドン     | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| パリ       | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  |    | ●   |
| ベルリン     | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| ブリュッセル   | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  |    |     |
| ローマ      | ●  |    | ●  | ●  | ●  |    |    |     |
| ジュネーブ    | ●  | ●  |    | ●  |    | ●  |    |     |
| ウィーン     | ●  |    | ●  |    | ●  | ●  |    | ●   |
| フランクフルト  |    | ●  |    |    |    | ●  |    |     |
| ベオグラード   | ●  |    | ●  |    |    |    |    |     |
| ワルシャワ    | ●  |    |    |    |    |    |    |     |
| モスクワ     | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| ウラジオストク  | ●  |    | ●  |    |    |    |    | ●   |
| ウランバートル  | ●  |    |    |    |    |    |    |     |
| ワシントン    | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| ニューヨーク   | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| ロサンゼルス   | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | ●   |
| サンフランシスコ |    |    | ●  |    |    |    |    |     |
| シリコンバレー  |    | ●  |    |    |    | ●  |    |     |
| シカゴ      |    | ●  |    |    |    | ●  |    |     |
| アーリントン   | ●  |    |    |    |    |    |    |     |
| サンパウロ    |    | ●  | ●  |    | ●  | ●  |    | ●   |
| リオデジャネイロ | ●  |    | ●  | ●  |    |    |    |     |
| ハバナ      | ●  |    |    | ●  |    |    |    |     |

ちなみに時事通信社の場合、海外の全支局を合わせても30カ所足らずで、特派員の数はいずれも現地スタッフ以外の特派員は私1人だけでした。アフガニスタン紛争取材していたニューデリー特派員だったときにも、たった1人で人口10億人のインドを含めて8カ国をカバーしていたわけですから、とても日本国内のような詳細なニュースカバーというのは望みようがないわけです。

私自身は、支局のあるインド以外の7カ国に積極的に取材に出掛けて、できるだけ独自の情報収集に努めたつもりですが、細かな動きというのは、欧米の報道でしか知ることができないこともあります。でも、そのような欧米に頼った取材を繰り返していると、イスラーム世界やムスリムの人たちに對する見方まで、欧米の基準に誘導されてしまいかねないという問題が生じます。

例えば今回のテーマ、あえて題字の「イスラーム原理主義」という言葉をかきカッコでくくり、これが特殊な用語であることを示したつもりですが、欧米メディアが多用していたこの「イスラミック・ファンダメンタリズム」という言葉や、「イスラーム過激派」というような言葉をそのまま使って毎回記事を流していると、テロが多発していることともあいまって、読者の方では、イスラーム世界やムスリム全体が「原理主義」で「過激派」なのだろうというふうに連想し、マインドコントロールされていきかねません。それが、イスラーム世界の人々に対する偏見をますます助長してしまう恐れがあります。

私が長野に赴任していた3年ほど前、信州の人たちにイスラームのことを正しく理解していただくためにと思って、このような勉強会の立ち上げを有志で考えたのも、そういう問題意識からでした。ちょうどIS、いわゆる「イスラーム国」が出現し、日本人ジャーナリストの後藤健二さんらが殺害されたりしていた時期でした。勉強会の設立に協力してほしいとお願いした人の中には、「そんなものをつくると、テロの標的になるのではないかと心配する人もいました。なにかイスラーム世界がみんな危険で、過激派ばかりだと思っておられるのではないかと感じました。

その後も2015年11月のパリ同時テロをはじめ、ヨーロッパを中心に残酷なテロ事件が続いたので、ますますイスラームやムスリムは危険だという風潮が強まり、特に欧米では、テロリストといえばムスリムだという先入観が広まった感じがします。

つい2日前に発表されたアメリカ国務省の国際テロに関する年次報告によりますと、2017年中のテロ件数は世界100カ国で8584件に上り、1万8753人が死亡したということです。

それでも前年比では、件数で23%、死者数では27%減っているそうです。特にISによるテロの死者数は、ISそのものがイラクとシリアで去年拠点を失ったために、前年比で53%減少したということですけれども、そうはいっても2万人近い人が犠牲になっているのを見ても、まだテロの脅威が去ったとはとても言えないのが現実でしょう。

きょうお話したアフガニスタンでは、米軍の空爆開始から約18年が経過しましたが、いまだに戦火はやまず、アメリカ軍は駐留を続けています。ソ連軍の侵攻から数えれば、すでに40年近くも、あの素朴なアフガニスタンの人々の苦難が終わらないわけです。アメリカでトランプ大統領がイスラーム諸国からの入国を禁止したり、パレスチナ人が前よりもいっそう迫害されたりしている現実を考えると、この状況が近い将来に収束することは望めないかもしれません。

われわれメディアが偏見にとらわれない公正な報道を心がけるとともに、みんなで地道にイスラーム世界を理解する努力を続けていくことしか、この問題の解決策はないのではないかと考えております。どうも長時間にわたって私のつたない話をお聞きくださり、誠にありがとうございました。(了)